

(7)

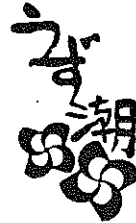
オピニオン

(第3種郵便物認可)

夏休みの休日の午後。上野の国立科学博物館を訪れた。目的は地球館にある「触れる地球」を体験することであった。その地球では、1万層の厚さをもつ対流圏が1ミリの厚さとなる。

手で触れる。ゆつくりと圧力をかける。地球儀が上下左右に回転する。大きく広げた腕の中で、地球を裏返したり、転がしたり、南極を上にしたり下にしたたり。

深く碧(あお)い海洋の上空を白い雲が流れる。インド亜大陸上で発生した雲が偏西風によって日本に運ばれてくる。海流は、大きくうねりながら大洋に痕跡を残す。そのようすは「今日の地球」と表現される。複数の人工衛星からの情報が整理され、それが地球



やまもと たろう  
山本 太郎

夏休みの休日の午後

くまで暗く静かだ。時間が経過する。朝の光が東から列島を覆う。ゆつくりと西に移動していく。再び時間が経過する。列島が夜を迎える。そしてまた朝がやって来る。朝のリレーだ。

カムチャツカの若者が きりん  
の夢を見ているとき  
メキシコの娘は 朝もやの中で  
バスを待っている  
ニューヨークの少女が ほほえ

儀上で再現される。  
長く伸びた列島弧がユーラシア大陸の下方に広がる。列島上には人工の光の束。一方で日本列島の南に広がる水をたたえた大洋はあ

いる

ぼくらは朝をリレーするのだ  
(谷川俊太郎「朝のリレー」、詩集「朝」より)

触れる地球をプロデュースした京都造形芸術大学芸術学部教授で文化人類学者の竹村真一氏は言う。「地球を生きたかたちで可視化したかった。リアルタイムの雲とか昼夜の境とか。われわれは宇宙に行つて何を発見したかということ、地球を発見したんです。こんな星はめつたにないということを見つけたわけです」

科学の進歩によって、私たち人類は空間の広がりをも、かつてない規模で認識できるようになった。問題は、その時、何を考えるかだと思つた。(長崎大熱帯医学研究所教授)